

俊寛

菊池寛

青空文庫

治承二年九月二十三日のことである。

もし、それが都であつたならば、秋が更けて、変りやすい晩秋の空に、北山時雨しぐれが、折々襲つてくる時であるが、薩摩さつまたの沖遙かな鬼界きかい島しまでは、まだ秋の初めでもあるように暖かだつた。

三人の流人るにんたちは、海を見下ろす砂丘さきゆうの上で、日向ひなたぼっこをしていた。ぽかぽかとした太陽の光に浴していると、ところどころ破れほころびている袷あわせを着ていても、少しも寒くはなかつた。

四、五日吹き続いた風の名残りが、まだ折々水沫みなわを飛ばす波がしらに現れているものの、空はいつぱいに晴れ渡つて、漣さざなみのような白雲が太陽をかすめてたなびいているだけだった。そうした晴れ渡つた青空から、少しの慰めも受けないように、三人の流人たちは、疲れ切った獣のように、黙つて砂の上に蹲うずくまっている。康頼やすよりは、さつきから左の手で手枕をして、横になっている。

康頼も成経なりつねも俊寛しゅんかんも、一年間の孤島生活で、その心も氣力も、すっかり叩きのめされてしまっていた。最初、彼らは革命の失敗者として、清盛きよもりを罵ののしり、平家の一門を呪い、陰謀の周密でなかったことを後悔し、悲憤慷慨ひふんこうがいに夜を徹することが多かった。が、一月、二月経つうちに、そうした悲憤慷慨が、結局鬼界ヶ島の荒磯に打ち寄する波と同じに、無意味な繰り返しに過ぎないことに気がつくともう誰も、そうしたことを口にする勇氣も無くしていた。その上に、都会人である彼らに、孤島生活の惨苦が、ひしひしと迫ってきた。毎日のように、水に浸した乾飯ほしいや、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にすると苦しみが、骨身にこたえてきた。彼らは、そうした苦痛を圧倒するような積極的な心持は、少しも動かない。彼らは苦痛が重なれば重るほど、しよげきってしまい、飯を食うほかは、天氣のよい日は海浜かいひんの砂地で、雨の降る日は仕方なくその狭い小屋の中で、ただ溜息と愚痴とのうちに、一日一日を過していた。そのうちに三人とも激しい不眠症に襲われた。その中でも、神経質の康頼がいちばんひどかった。彼は、夜中眠られない癖がついてしまったので、昼間よく仮寝うたたねをする。さつきからも、横になったかと思うと、もうかすかないびきを立てている。長い間、剃刀かみそりを当てない髯ひげがぼうぼうとしてその痩せこけた頬を掩おほうている。その上、褪あせた唇の下端したには、涎よだれが今にも落ちそうに湛たえている。

成経は成経で、妖怪もののけに憑つかれたような、きよとんとした目付きで、晴れた大空を、あてどもなく見ながら、溜息ばかりついている。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、こうした辛抱のない、腑甲斐のない様子を見てみると、自分自身までが情なくなる。陰謀を企てた人間として、いますこしは男らしい、毅然きぜんとしたところがあってもいい。刑罰のもとに、こうまでへこたれてしまわなくともいいと思う。彼は、成経がもう一度溜息をついたら、それを機会に、たしなめてやろうと思ひながら、じつと成経の顔を見据えていたが、成経はそれと悟ったわけでもあるまいが、くるりと俊寛の方へ背を向けると、海の方へ向いたまま、これもしばし、まどろむつもりだろう、黙り込んでしまった。

二人の友達が黙ってしまうと、俊寛の心も張合いが抜けたように、淡い悲しみに囚われる。彼にも、島の生活がたまらなく苦痛になってきた。都へ帰りたい。そうした渴きに似た感情で、胸を責められるその上、成経、康頼らの心持と、自分の心持とが日に増しこじれてくることを感じた。人間が、三人集まるときは、きつとその中の二人だけが仲よくなり、一人だけは孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それがことに激しかった。康頼も、成経も、彼らの生存が苦しくなればなるほど、愚痴になつてくる。そして、過ぎ去った謀反むはんの企てを心のうちで後悔しはじめる。人間はいかなる場合でも、自分を怨うらまな

いで、他人を怨む。そして、陰謀の発頭人であつた西光さいこうを怨む。ひいては西光といちばん親しかつた俊寛を怨む。彼らを、こうした絶海の孤島で悶えもたさせるのは、清盛の責任でなくして、本当は、西光が陰謀を発頭したためであるかのようなことをいう。西光の人格や陰謀の動機をよく理解している俊寛には、彼らのそうした愚痴しやくが、癢かゆに触つて仕方がない。彼の神経は、日に増しいらいらする。そうして、何かのはずみから、つい気色けしきばんで、言い争う。二人は俊寛を煙たく思ひはじめる。そして、剛腹な俊寛に一致して反抗の氣勢を示す。そして、お互いに心持すさを荒ませる。

この頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外しているのを感じる。硫黄いおうを採りに行く時でも、海藻を採りに行くときでも、よく二人きりで行つてしまふ。その上、三人でいるときでも、二人はよく顔を寄せ合つて、ひそひそ話を始める。そんなとき、俊寛はたまらない寂寥せきりようと不快を感じる。三人きりの生活では、他の二人に背かれるということ、人間全体から背かれるということと同じことだった。俊寛は、そうした心苦しさを免れようとして、自分一人で行動してみようかと考えた。が、一日自分一人で、離れていると、激しい寂しさに襲われる。そして、意気地なく成経と康頼との所へ帰つてくる。そして再び、不快な感情のうちに、心を傷つけながら生活していく。

今朝も、鹿ヶ谷^{ししたに}の会合の発頭人は誰だということで、俊寛は成経とかなり激しい口論をした。成経は、真の発頭人は西光だといった。だから、西光だけは、平相国^{へいそうこく}がすぐ斬つたではないかといった。俊寛は、いな御身の父^{おんみ}の成親^{なりちか}卿こそ、真の発頭人である。清盛が、御身の父を都で失わなかったのは、藤氏^{とうし}一門の考えようを、憚^{はばか}つたからである。その証拠には、備前へ流されるとすぐ人知れず殺されたではないかといった。父のことを、悪しざまにいわれたので、日頃は言葉すくない成経も、烈火のように激して、俊寛と一刻近くも激しく言い争った。二人が、口論に疲れて、傷つけられた胸を懷きながら、黙つてしまふまで。

成経と康頼とが、横になつていゝぎたない様子を見てみると、俊寛は意地にもその真似をする気にはなれなかつた。彼は、胸のうちの寂しさとむしゃくしゃした鬱^{うつ}懷^{かい}とをもらすところのないままに、腕組をして、じつと考える。すると、いつもの癖であるように、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿がまばろしのように、胸の中に浮んでくる。それから、京極の宿所の釣^{つり}殿^{どの}や、鹿ヶ谷の山莊の泉^{せん}石^{せき}のたたずまいなどが、髻^{ほう}髻^{ふつ}として思い出される。都会生活に対するあこがれが心を爛^{ただ}らせる。たくさん使つていた下僕^{しもべ}の一人でもが、今^{かしず}侍^{ざむらい}いていてくれればなどと思う。

俊寛が、こうした回想に耽^{ふけ}つているとき、寝入っていたと思つた成経が急に立ち上つた。彼は、悲鳴とも歎声ともつかない声を出したかと思うと、砂丘を海の方へ一散に駆け降りた。

彼は、波打際^{ぎわ}に立つと、躍るように両手を打ち振つた。

「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ」

そういつて、康頼に知らせると、また悲鳴のような声をあげながら、浜辺を北へ北へと走つた。

康頼も、あわただしい声にすぐ起き上つた。俊寛も、白帆だときくと、すぐ立ち上らずにはいられなかつたが、白帆が見えるといつて成経が浜辺を走つたことは、これまでに二度あつた。彼はよく白雲の影を白帆と間違えたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、さすがにすぐ後に続いて走つたが、俊寛はまたかと思ひながら、無言のまま、跡からついて行つた。成経と康頼とは砂浜を根よく走りつづけた。俊寛も、彼らの熱心な走り方を見ると、自分の足並みが、いつの間にか、急ぎ足になるのをどうともすることができなかつた。

そのうちに、疑い深い俊寛の瞳にも、遙かなたの水平線に、波に浮んでいる白千鳥のように、白い帆をいっぱい張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づいて来る船の姿が映らずにはいなかった。

俊寛も、狂気のように走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走った。お互いに立ち止って待ち合わせる余裕などはなかった。走るに従って、白帆もだんだん近づいて来るのだった。それは、九州から硫黄を買いに来る船のような小さい船ではなかった。

成経は、感激のために泣きながら走っている。康頼もそうだった。俊寛も、胸が熱くしくなつて、目頭めがしらが妙にむずがゆくなつてくるのを感じた。見ると、船の舳へさきには、一流の赤旗がへんぽんと翻ひるがえつている。平家の兵船だと思つと、その船に赦免しゃめんの使者が乗っていることが三人にすぐ感ぜられた。

船は、流人るにんたちの姿を見ると、舳を岸の方へ向けて、帆をひたひたと下ろしはじめた。やがて、船は岸から三反いかりとない沖へ錨を投げる。三人は岸边に立ちながら、声を合せて欣よろこびの声をあげた。さすがに、俊寛をも除外しないで、三人は、手を取りあつたまま、声をあげて泣きはじめたのである。

二

船は、流人たちの期待に背かず、清盛からの赦免の使者、丹左衛門尉基康を乗せ

ていた。が、基康の持つていた清盛の教書は、成経と康頼とを天国へ持ち上げるとともに、俊寛を地獄の底へ押し落した。俊寛は、狂気のように、その教書を基康の手から奪い取って、血走る目を注いだけれども、そこには俊寛とも僧都とも書いてはなかった。俊寛は、激昂のあまり、最初は使者を罵った。俊寛の名が漏れたのは、使者の怠慢であるといいつのつた。が、基康が、その鋒鋷を避けて相手にしないので、今度は自分を捨てて行くというとする成経と康頼に食ってかかった。そして、成経と康頼とを卑怯者であり、裏切者であると罵倒した。成経が、それに堪えかねて、二言三言言葉を返すと、俊寛はすぐかつとなつて、成経に掴みかかうとして、基康の手の者に、取りひしがれた。

それから後、幾時間かの間の俊寛の憤りと悲しみと、恥とは喻えるものもなかった。彼は、目の前で、成経と康頼とがその垢じみた衣類を脱ぎ捨てて、都に在る縁者から贈られた真新しい衣類に着替えるのを見た。嬉し涙をこぼしながら、親しい者からの消息を読んでいるのを見た。が、重科を赦免せられない俊寛には、一通の玉章をさえ受けることが

許されていなかった。俊寛は、砂を噛み、土を掻きむしりながら、泣いた。

船は、飲料水と野菜とを積み込み、成経と康頼とを収めると、手を合わせて乗船を哀願する俊寛を浜辺に押し倒したまま、岸を離れた。

そして、俊寛をもっと苦しめるための故意からするように、三反ばかりの沖合に錨を投げて、そこで一夜を明かすのであった。

俊寛は、終夜浜辺に立つて、叫びつづけた。最初は罵り、中途では哀願し、最後には、たわいもなく泣き叫んだ。

「判官どの、のう！ 今一言申し残せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候え」

「基康どの、僧都をあわれと思^{おぼしめ}召さば、せめて九国^{くごく}の端までも、送り届け得させたまえ」が、俊寛の声は、渚^{なぎさ}を吹く海風に吹き払われて、船へはすこしもきこえないのだろう。

闇の中に、一の灯もなく黒く纏^{もや}つている船からは、応という一声さえなかった。

夜が更^ふくるにつけ、俊寛の声は、かすれてしまった。おしまいには、傷ついた海鳥が泣くようなかすかな悲鳴になってしまった。が、どんなに声がかすれても、根よく叫びつづけた。

そのうちに、夜はほのぼのと明けていった。朝日が渺^{びようびよう}々たる波のかなたに昇ると、

船はからからと錨を揚げ、帆を朝風にばたばたと靡かせながら巻き上げた。俊寛は、最後の叫び声をあげようとしたけれども、声はすこしも咽喉から出なかった。船の上には、右往左往する水夫どもの姿が見えるだけで、成経、康頼はもとより、基康も姿を現さない。

見る間に船は、滑るように動き出した。もう、乗船の望みは、すこしも残ってはいなかったが、それでも俊寛は船を追わずにはいられなかった。船は、島に添いながら、北へ北へと走る。俊寛は、それを狂人のように、こけつまろびつ追った。が、三十町も走ると、そこは島の北端である。そこからは、翼ある身にあらざれば追いかけることができない。折から、風は吹きつのはつた。船の帆は、張り裂けるように、風を孕んだ。船は見る見るうちに小さくなっていく。俊寛は、岸壁の上に立ちながら、身を悶えた。もう声は、すこしも出ない。ただ、獣のように岸壁の上で狂い回るだけだった。

船は、俊寛の苦悶などには、なんの容赦もなく、半刻も経たないうちに、水平線に漂う白雲のうちに、紛れ込んでしまった。船の姿を見失ったとき、俊寛は絶望のために、昏倒した。昨夜来叫びつづけた疲労が一時に発したのだろう、そのまま茫として眠り続けた。

彼は、その岸壁の上で、昏倒したまま、何時間眠っていたかは、自分にも分からなかった。一度目覚めたときは、夜であつた。彼は、自分の頭の上の天空が、大半は暗い雲に覆われて、そのわずかな切れ目から、二、三の星が瞬またたいているのを見た。彼は激しい渇きと、全身を砕くような疼痛とうつうを感じた。

彼は、水を飲みたいと思ひながら、周囲を見回した。が、岸壁の背後は、すぐ礮ぎょうかく

な山になつてゐるらしく、小川とか泉とかが、ありそうに思へなかつた。それでも、激しい渇きは、彼を一刻もじつとしていさせなかつた。彼は、寝ていた岩から、身を剥はがすようにして立ち上つた。立ち上るとき、身体のもろもろの関節が、音を立てて軋きしるように思つた。彼は、それでも這はうようにして、岸壁を降りることができた。彼は昼間（それは昨日であるのか一昨日であるのか分からなかつたが）夢中で走つた道を、二町ばかり引返した。彼は、昼間そこを走つたとき、榕樹ようじゆが五、六本生えていて、その根に危く躓つまずきそうになつたのを覚えていた。彼の濁つてしまつてゐる頭の中でも、榕樹の周囲を探せば水があるかも知れないという考えが、ぼんやり浮んでいた。

が、榕樹の生えてゐる周囲を、海の水あかりで、二、三度探して回つてみたけれども、そこらは一面に唐竹からたけが密生しているだけで、水らしいものは、すこしも見当らない。俊

寛は、その搜索に残っていた精力を使いつくして、崩れるように地上へ横たわると、再び昏々として眠りはじめた。

二度目に目が覚めたとき、それは朝だった。疲れ萎びている俊寛の頬にも、朝の微風が快かった。彼が目を開くと、自分の身体の上に茂り重っている蒼々たる榕樹の梢を洩れたすがすがしい朝の日光が、美しい幾条の縞となつて、自分の身体に注いているのを見た。さすがに、しばらくの間は、清らかな氣持がした。が、すぐ二、三日來の出來事が、悪夢のように歸つてき、そして激しい渴きを感じたので、彼はよろよろと立ち上つた。それでも、縹渺と無邊際ひようびよう むへんがいに広がっている海を、未練にももう一度見直さずにはいられなかった。が、群青色ぐんじよういろにはろばろと続いている太平洋の上には、信天翁あほうどりの一群が、飛び交うているほかは、何物も見えない。成経や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に止つているはずはなかった。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を焼くような渴きと餓えとが、激しく身に迫つてきた。

彼は、赦免の船が來て以來、何も食っていないのだった。基康はさすがに彼をあわれがつて、船の中で炊いだ飯かしを持って來てくれたのであるが、瞋恚しんいの火に心を焦こがしていた俊寛

は、その久しぶりの珍味にも目もくれないで、水夫かこの手から、それを地上に叩き落とした。むろん、今でも自分の小屋まで帰れば乾飯ほしいもたくさん残っている。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは、残っていないかった。

激しい渇きと餓えとは、彼の心を荒すさませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げることを考えた。そうして、なぜ基康の船がいるうちに、死ななかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成経や康頼の目前で死んだならば、すこしは腹癒はらいせにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死にであると思つた。が、死のうという心は変らなかつた。帰洛きらくの望みを永久に断たれながら暮していくことは、彼には堪えられなかつた。二十間ばかり向こうの岸に、一つの岩があり、その下の水が、ことさらに深いように見えた。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂いを嗅いだ。それは、真水まみずの匂いであつた。極度に渇している彼の鼻は、犬のように鋭くなっているのだつた。彼は、水の匂いを嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獣のように潜くぐつた。十問ばかり潜つたとき、その林が尽きて、そこから岩山が聳そびえていた。

ふと、そこに、大きい岩を背後うしろにして、この島には珍しい椰子やしの木が、十本ばかり生えているのを見た。そしてその椰子に覆われた鳶色とびいろの岩から、一条の水が銀の糸のように

滴^{したた}つて、それが椰子の根元で、小さい泉になつてゐるのを見た。水は、浅いながらに澄み切つて、沈んでいる木の葉さえ、一々に数えられた。渴し切つてゐる俊寛は、犬のようにつくばつて、その冷たい水を思い切りがぶがぶ飲んだ。それが、なんという快きであつただろう。それは、彼が鹿ヶ谷の山荘で飲んだいかなる美酒にも勝^{まさ}つていた。彼が、その清^{せい}冽^{れつ}な水を味わつてゐる間は、清盛に対する怨みも、島にただ一人残された悲しみも、忘れ果てたようにすがすがしい氣持だつた。彼は、蘇^{よみがえ}つたような氣持になつて立ち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい実が二つばかり生^なつてゐるのを見た。俊寛は、疲労を忘れて、猿のようによじ登つた。それを叩き落すと、そばの岩で打ち砕き、思うさま貪^{むさば}り食つた。

彼は、生れて以来、これほどのありがたさと、これほどのうまさとで、飲食したことはなかつた。彼は椰子の実の汁を吸つてゐると、自分の今までの生活が夢のように淡く薄れていくのを感じた。清盛、平家の一門、丹波^{たんばのしやうしやう}少将^{しやうしやう}、平判官^{たいちのはんがん}、丹左衛門尉^{たんさえもんじやう}、そんな名前や、そんな名前に対する自分の感情が、この口の中のすべてを、否、心の中すべてを溶かしてしまうような木の実の味に比べて、まったく空虚なつまらないもののようないな気がしはじめた。

俊寛は、口の中に残る快い感覚を楽しみながら、泉のほとりの青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活のいろいろな相^{そう}を、心の中に思い出してみた。都におけるいろいろな暗闘、陥^{かん}擠^{せい}、戦争、権勢の争奪、それからくる嫉妬、反感、憎悪。そういう感情の動くままに、狂^{きやう}奔^{ほん}していた自分のあさましさが、しみじみ分かったような気がした。船を追って狂奔した昨日の自分までが、餓鬼^{がき}のようにあさましい気がした。煩^{ぼん}悩^{のう}を起す種のないこの絶海の孤島こそ、自分にとって唯一の浄土ではあるまいか。康頼や成経がそばにいたために、都の生活に対する、否、人生に対する執着が切れなかったのだ。この島を仮のすみかと思えばこそ、硫黄ヶ岳に立つ煙さえ、焦熱地獄に続くもののように、ものうく思われたのだ。こここそ、ついすみかだ。あらゆる煩惱と執着とを断つて、真^{しん}如^{によ}の生活に入る道場だ。そう思い返すと、俊寛は生れ変わったような、ほがらかな気持がした。

ふと、寝がえりを打つと、すぐ自分の鼻の先に、撫^{なで}子^{しこ}に似た真っ赤な花が咲いていた。それは、都^{みやこ}人^{びと}の彼には、名も知れない花だった。が、その花の真^{しん}紅^くの花弁が、なんという美しさで、清らかさを持っていたことだろう。その花を、じっと見詰めていると、人間のすべてから知られないで、美しく香^{にお}っている、こうした名も知れない花の生活といったようなものが考えられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさえ、むげに生甲斐

のないものだとは思われなくなった。彼は、自殺しようとした自分の心のあさはかさを恥じた。彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は勇躍して立ち上った。そして、海岸へ走り出た。いつもは、魂も眩むようにものうく思われた大洋が、なんと美しく輝いていたことだろう。十分昇り切った朝の太陽のもとに、紺碧の潮が後から後から湧くように躍っていた。海に接している砂浜は金色に輝き、飛び交うている信天翁の翼から銀の光を発するかと疑われ、いつもは見ることを厭っていた硫黄ヶ岳に立つ煙さえ、今朝は澄み渡った朝空に、琥珀色に優にやさしくたなびいている。

俊寛は、童のようなのびやかな心になりながら、両手を差し広げ、童のように叫びながら自分の小屋へ駆け戻った。

三

島に来て以来一年の間、俊寛の生活は、成経や康頼との昔物語から、謀反の話をして、おしまいにはお互いの境遇を嘆き合うか、でなければ、砂丘の上などに登りながら、波路遙かな都を偲んで溜息をつきながら、一日を茫然と過ごしてしまうのであったが、俊寛は

そうした生活を根本から改めようと決心した。

彼は、つとめて都のことを考えまいとした。従つて、成経や康頼のことを考えまいとした。彼は、成経や康頼が親切に残して置いてくれた狩衣かりぎぬや刺貫さしつらを、海中へ取り捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは分かりきっていた。が、困ったら、土人のように木の皮を身に纏まとうても差支えないと考えた。

その上、三人でいた間は、肥前ひぜんの国加瀬くにかせの荘しょうにある成経の舅しゅうとから平家の目を忍んでの仕送りで、ほそぼそながら、朝夕ちようせきの食に事を欠かなかった。そのためでもあるが、三人は大宮人おおみやびとの習慣を持ちつづけて、なすこともなく、毎日暮していた。俊寛は、そうした生活を改め、自分で漁すなでりし、自分で狩りし、自分で耕たがやすことを考えた。

彼は、そういう生活に入る第一歩として、成経や康頼の記憶がつきまといっている今までの小屋を焼き捨て、自分で発見したあの泉ほとりの畔ほとりに、新しい家を自分で建てることを考えた。彼は、その日から、泉に近い山林へ入つて、木を伐った。彼が持っている道具は、一挺の小さい鉞まさかりと二本の小太刀であった。周囲が一尺もある木は、伐り倒すのに四半はん刻どき近くかかった。が、彼が額ひたいに汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名状しがたい壮快な氣持がする。清盛に対する怨みなどは、そうした瞬間、泡のように彼の頭から消え去

っている。そして、その木が鉞の幾落下^{いくらつか}によって、力尽き、地を揺がせて倒れるとき、俊寛の焼けた顔には、会心の微笑^{えみ}が浮ぶ。彼は、そうして伐り倒した木の枝を払い、一本ずつやつとの思いで、泉の畔に引いてくる。彼は、その粗^{ラフ}な丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や鉞で穴を掘ることは、かなり骨が折れた。ことに、そういう仕事に用いることで、これから先の生活にどんな必要であるかもしれない道具が破損することを、恐れねばならなかった。屋根は、唐竹で葺^ふいた。この島の大部分を覆うている唐竹は、屋根を葺くのは、藁よりもはるかに秀れていた。木の枝を、横にいくつも並べて壁にした。そして、近所から粘^{ねば}い土を見出して、その上から塗抹^{とまつ}した。彼は、この新しい家を建てるために、二十日ばかりもかかった。が、彼は自分の住む家を自分で建てるのが、どんなに楽しみの仕事であるかが分かった。その間、清盛に対する怨みや、妻子に対する恋しさが、焼くように胸に迫ることがある。そんなとき、彼は常よりも二倍も三倍も激しく働く。むろん、島に夕暮が来て、日が荒^{こうりよう}寥^{よう}たる硫黄ヶ岳のかなたに落ち、唐竹の林に風が騒^{さわ}ぎ、名も知れない海鳥が鳴くときなど、灯もない小屋の中に蹲^{うずくま}っている俊寛に、身を裂くような寂しさが襲ってくる。が、昼間の激しい労働が産む疲労は、すぐ彼をそうした寂しさから救ってくれ、そして彼に安らかな眠りを与えてくれる。

新しい小屋ができたとき、彼はその次には、食物のことを考えた。三人で食い残した乾飯^{はい}は、まだ二月、三月は、俊寛一人を支えることができた。が、成経がいなくなった今は、成経の舅から仕送りがあるはずはなかった。今は、自分で食物を耕し作るよりほかはなかった。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔った所に、やや開けた土地があり、硫黄ヶ岳に遠いために硫黄の気がすこしもないことを知った。

彼は、そこを冬の間に開墾し、春が来れば麦を植えようと思った。が、差し当っては、漁^{すな}りと狩をするほかに、食料を得る道はなかった。

彼は、堅^{けんろう}牢な唐竹を伐つて、それに蔓^{つる}を張つて弓にした。矢は、細身の唐竹を用い、矢尻は鋭い魚骨を用いた。本土ならば、こうした矢先にかかる鳥は一羽もいなかっただろうが、この島に住んでいる里^{さと}鳩^と、唐^{から}鳩^と、赤^{あか}髭^{ひげ}、青^{あお}鷺^{さぎ}などは、俊寛の近づくのをすこしも恐れなかった。半日、山や海岸を駆け回ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、漁^{すな}りはむげに卑しいことだと思っていた。ひたすらに都会生活に憧れていた彼は、そうしたことを真似てみようという気は起らなかった。が、現在の彼は、土人に習つて漁りをしてみようと考えた。その頃の島は、鰻^{うなぎ}を取る季節であつた。永良部^{えいりょうぶ}鰻は、秋から冬にかけて島の海岸の暖かい海水を慕つて来て、そこへ卵を産む

のであつた。土人は、海水の中に身を浸してそれを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、いくど掴つかんでも掴み損ねた。土人は、あやしい言葉で何かいいながら、俊寛をわらつた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく続けて試みているうちに、魯鈍ろどんで、いちばん不幸な鰻が、俊寛の手にかかる。五日と経ち、七日と経つうちに、どんな敏捷な鰻でも俊寛の手から逃れることができなくなってくる。彼は、何十匹と獲えた鰻のあごに蔓を通し、それを肩に担ぐ。蔓が、肩に食い入るように重い。が、自分が獲つたのであると思うと、一匹だつて、捨てる気はしない。小屋へ帰つてから、彼は小太刀で腹を割さき、腸わたを去つてから、それを日向ひなたへ乾す。半月ばかり鰻を取っているうちに、小屋の周囲は乾した鰻でいっぱいになる。そのうちに、鰻の取れる季節は、過ぎ去つてしまう。そして、冬が来た。冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になつた。彼は、まず畑のために選定した彼の広闊こうかつな土地へ、火を放つた。そして、雑草や灌木かんぼくを焼き払つた。それから、焼き残つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鉞くわは、今度は鉞くわの用をした。道具がないために、彼の仕事は捗はかどらなかつた。土人の所に行けば、鋏くわに似たものがあるのを知つていた。が、報酬なしに土人が何物をも貸さないことを知つていた。が、彼の精根は、そうしたものに、すべて打ち克かつた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依ひつて拓ひら

かれた。彼に今最も必要なことは、そこに蒔かねばならない麦の種であつた。彼は、麦の種を土人が手放さないのを知つていた。彼は、それと交易こうえきするために、自分の持物の中で、土人の欲しがりそうなものをいろいろ考へてみた。土人の欲しがりそうなものは、自分の生活にも欠くべからざるものだった。俊寛は、ふと鳥羽とばで別れるとき、妻の松の前から形見かたみに贈られた素絹しろぎぬの小袖を、今もなおそのままに、持っているのに気がついた。それは、現在の彼にとつて、過去の生活に対する唯一の記念物だった。彼は、一晩考へた末、この過去の生活に対する記念物を、現在の生活の必須品ひつすひんに換へることを決心した。彼は、いとしい妻の形見を一袋の麦に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に、蒔いた。自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中で、いちばん素晴らしいものであることを、俊寛は悟つた。ほのかな麦の芽が、磯ぎようかくな地殻からおぞおぞと頭を擡もたげるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽むせんだ。彼は跪ひざまずいて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界ヶ島にも春はめぐつてくる。島の周囲の海が、薄紫に輝きはじめる。そして、全島には、椿つばきの花が一面に咲く。信天翁あほうどりが、一日一日多くなつて、硫黄ヶ岳の中腹などには、雪が降つたように、集つてゐる。

生れて初めての自然生活は、俊寛を見違えるような立派な体格にした。生白かった頬は、褐色に焼けて輝いた。去年、着続けていた僧侶の服は、いろいろのことをするのに不便なので、思い切つてそれを脱ぎ捨て、思い切つて皮かつらを身にまとつた。生年三十四歳。その壮年の肉体には、原始人らしいすべての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髪を無造作に藁で束ねた。六尺豊かの身体は、鬼のような土人と比べてさえ、一際立ち勝つて見えた。

彼は、時々自分の顔を、水鏡で映して見る。が、その変りはてた姿を、あさましいなどと思つたことはない。むろん現在の彼には、妻子が時々思い出されるだけで、清盛のことなどは、念頭になかつた。平家が、千里のかなたで奢つていようがいまいが、そんなことは、どちらでもよかつた。それよりも彼は、自分が植えつけた麦が成長するのが、一日千秋の思いで待たれた。

麦の畑に生うる雑草を取ることは、彼の半日の仕事として、十分だった。が、午後からは海岸へ出て、毎日のように鰯を釣つた。糸は太い蔓を用い、針は獣の骨で作つた。三、四尺の大魚は、針を入れると同時に、無造作に食いつく。それを引き上げるのが、どんなに壮快であつただろう。それは、魚と人間との格闘であつた。俊寛は危うく海の中へ、引

きずり込まれそうになる。それを、岩角へ足をふんばって、ぐっと持ち堪える。魚はそんなにかかった針をはずそうとして、波間で白い腹をかえしながら身を悶える。そうした格闘が、半刻近くも続く。そのうちに、魚の力が弱ってくる。それでもなお、身体を激しく捻じ曲げながら、水面に引き上げられる。

この豪快な鰯釣が、この頃の俊寛にとっては、仕事でもあり、娯楽でもあった。四尺を越す大魚を三、四匹繋いで、砂の上を小屋まで引きずって帰るのは苦しい仕事であつた。が、それを炙ると、新鮮な肉からは、香ばしい匂いが立ち、俊寛の健啖な食欲をいやが上にも刺激する。

彼は、毎日のように、近所の海角に出て、鰯を釣った。彼は、その魚から油を取って、灯火の油にしようと考えたのである。

鰯は、群を成して島の周囲をめぐるついていた。俊寛は、その群を追うて、自分の小屋から一里近くも遠方へ出ることもあつた。

その日も、俊寛は、鰯を釣るために硫黄ヶ岳のすぐ麓の海岸まで行つた。そこからは土人の部落が、半里とも隔つていなかった。土人たちは、本土の人間を恐れ嫌つた。三人でいたときは、土人たちは遠方から三人の姿を見ると、避けた。俊寛一人になつてからは、

恐れはしなかった。が、一種気味の悪いもののように、決して近づいては来なかった。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落へは、できるだけ近寄らないようにした。が、その日は、近所の海岸には、鰯の姿が見えないたため、それを探しながら、とうとう、土人の部落近くまで来てしまった。

彼の針に、そのの海岸で、今まで上ったことのないような大魚がかかった。それは、鰯としても珍しい五尺を越える大魚だった。彼は、その岩角で、一刻近くも、それを釣り上げるために、奮闘した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆わ^{さから}ないように手の中の蔓を延ばした。もう延ばすべき蔓がなくなると、蔓は緊張して、水を切りながらキイキイ鳴った。

彼は、魚が頭が自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しないで、蔓を手早く手元へ繰り寄せる。一間ばかりの水底まで来た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂い回る。が、水際までは決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩^{ゆる}むと矢のように、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、緩めたりすることによって、水中の魚を疲らせようとする。半裸体のまま岩頭に立って活動する俊寛の姿は、目ざましいものであった。

とうとう、俊寛はその五尺を越ゆる大魚を征服してしまう。岩の上に釣り上げられた後

も、なお跳躍して海に入ろうとする魚の頭を、俊寛はそばの大石で一打ちする。魚は尾や鰭ひれを震わせながら、死んでしまう。俊寛は、その二十貫を越える大魚の腹に足をかけながら、初めて会心の微笑をもらす。

その時俊寛は、ふと人の気配を感じた。魚を釣るために、夢中になっていた俊寛は、気がついて周囲を見回した。見ると、いつの間に近寄ったのだろう。一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、俊寛の姿をじつと見詰めているのだった。おそらく俊寛の勇ましい活躍を先刻から見ていたのだろう。

年は、十六、七であつたろう。が、背丈せたけはすすくと伸びて、都の少女などには見られないような高さに達していた。腰の周囲に木の皮を纏まとっただけで、よく発達した胸部を惜し気もなく見せていた。髪は梳くしけずらず、蔓草をさねかずらにしていた。色は黒かったが、瞳が黒く人なつこく光っていた。

長い間、女性と接したことのない俊寛は、この少女を一目見ると、自分の裸体が気恥ぎやうかしくなつて、思わず顔が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑さいぎもなく、無邪気に自分を凝視ししているのを見ると、俊寛はそれに答えるように、軽い微笑を見せずにはいられなかった。少女は微笑はしなかったが、そのもの珍しげに瞠みはっている目に、好意を示す表情が

動いたことは確かだった。俊寛は、久しぶりに人間から好意のある表情を見せられたので、胸がきゅつとこみ上げてくるように感じた。

彼は、再び針を海中に投じた。魚は、すぐ食いついた。その魚を引き上げる間、少女は熱心に見物している。そして第三番目の針を投じて、少女は去らない。俊寛は、少女の方を振り向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄いおうを採るために来たのだろう。が、硫黄を入れる筈はこをそばへ置き捨てたまま、いつまでも俊寛が鰯を釣り上げるのを見ている。とうとう夕暮が来た。俊寛は、釣り上げた魚を引きずりながら、自分の小屋への道を辿たどる。一町ばかり歩いて、後を振り返った。少女も家路いえじに向おうとして立ち上っている。が、歩き出さないで、俊寛の方を、じつと見詰めている。

俊寛は、その日から自分の生活に新しい希望が湧いたことに気がつく。彼は、その翌日も同じ場所に行った。すると、昨日の少女が、昨日彼女が蹲うずくまっていたのと同じ場所に蹲っているのを見る。俊寛の胸には、湧き上るような欣よろこびが感ぜられる。今日こそ、昨日よりもっと大きい鰯を釣り上げて少女に見せてやろうと思う。が、昨夜の間に、鰯はこの海岸を離れたとみえ、いくら針を投げて、手答えがない。

彼はいらいらして、幾度も幾度も針を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手答えがない。

彼は、少女が退屈して、立ち上りはしないかと思うといらして来る。が、少女はじつと蹲ったまま身動きもしない。俊寛は、ほかの釣場所を探ろうと思うけれども、少女がもし随ついてこなかったらと思うと、この場所を動く気はしない。そのうちに、俊寛は疲れて、針を水中に投じたまま、手を休めてしまう。

その時に、突然かの少女が叫び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけているのではないかと思った。が、少女は天の一方を見詰めながら叫んでいる。そのうちに、俊寛は、その叫び声の中に、ある韻いんりつ律があるのに気がつく。

そして、この少女が歌をうたっているのだということが分かる。それは朗詠ろうえいや今様いまようなどとは違って、もつと急調な激しい調子である。が、そのききなれない調子、意味のまことばつたく分からない詞の中に、この少女の迫った感情が漲みなぎっているのを俊寛は感ぜずにはいられなかった。

俊寛は、やるせなくこの少女がいとしくなる。歌い終ると、少女は俊寛の方へその黒い瞳の一瞥べつを投げる。俊寛はたまらなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲っていた少女は、急に立ち上つて五、六間向うへ逃げる。が、そこに立ち止まったまま、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑をしながら手招きする。が、少女は微笑を

もつてそれに答えるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ帰る。すると、少女も元の場所へ帰って蹲る。そして、時々思い出したように歌いつづける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行った。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行った。もう鰯を釣る目的ではなかった。

幾日も幾日も、そうした情景が続いた後、少女はどうとうその牝鹿めしかのようにしなやかな身体を、俊寛の強い双腕もうでに委してしまった。

俊寛は、もう孤独ではなかった。かの少女は、間もなく俊寛のために、従順な愛すべき妻となった。むろん、土人たちは彼らの少女を拉らっしたのを知ると、大挙して俊寛の小屋を襲つて来た。二十人を越す大勢に対して、すこしも怯むひるところなく、鉞まさかりをもつて立ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に対する愛情を増すのに、十分であつた。が、恐ろしい惨劇さんげきが始まろうとする刹那、少女はいちはやく土人の頭らしい老人の前に身を投じた。それは、少女の父であるらしかった。老人は、少女から何事かをきくと、怒り罵ののる若者たちを制して、こともなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和のほかは、何物も襲つて来なかつた。

手助けのできた俊寛は、自分たちの生活を、いろいろな点でよくしていった。都会生活の経験のよいところだけを妻に教えた。無知ではあったが、利発な彼女は俊寛のいうことを理解して、すこしずつ家庭生活を愉快にしていた。

結婚してからすぐ、俊寛は、妻に大和言葉やまとを教えはじめた。三月経ち四月経つうちには、日常の会話には、ことを欠かなかった。蔓草のさねかずらをした妻が、閑雅かんがな都言葉を口にすることは、俊寛にとつて、この上もない楽しみであつた。言葉を一通り覚えてしまうと、俊寛は、よく妻を砂浜へ連れて行つて、字を書くことを教えた。浅香山あさかやまの歌を幾度となく砂の上に書き示した。

妻は、その年のうちに、妊娠した。こうした生活をする俊寛にとつて、子供ができるということは普通人の想像も及ばない喜びだつた。俊寛は、身重なくなった妻を営めるように、いたわるのであつた。翌年の春に、妻は玉のような男の子を産んだ。子供ができてからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍にもなつた。

俊寛の畑は毎年よく実つた。彼は子供ができたのを機会に、妻に手伝わせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が来ても、びくともしないような堅牢なものになった。

男の子が生れたその翌年に、今度は女の子が生れ、その二年目に、今度はまた男の子が

生れた。子供の成長とともに、俊寛の幸福は限りもなく大きくなっていた。鬼界ヶ島に流されたことが、自分の不運であつたか幸福であつたか分からない、とまで考えるようになっていた。

四

有王^{ありおう}が、故主の俊寛を尋ねて、都からはるばると九国^{こく}に下り、その便船^{べんせん}を求めて、硫黄商人の船に乗り、鬼界ヶ島へ来たのは、文治二年^{ぶんじ}の如月半^{きさらぎなか}ばのことだった。

寿永四年^{じゅえい}に、平家の一門はことごとく西海^{さいかい}の藻屑^{もくず}となり、今は源家の世となつているのであるから、俊寛に対する重科も自然消え果てて、赦免の使者が朝廷から到来すべきはずであつたが、世は平家の余類追討に急がわしく、その上、俊寛は過ぐる治承三年に、鬼界ヶ島にて絶え果てたという風聞さえ伝わっていたから、俊寛のことなどは、何人^{なんびと}の念頭にもなかった。

ただ、故主を慕う有王だけは、俊寛の最期を見届けたく、千里の旅路に、憂^うき艱難^{かんなん}を重ねて、鬼界ヶ島へ下つたのである。

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し回った。が、それらしい人には絶えて会わなかった。島人には、言葉不通のため、ききあわすべき、よすがもなかった。そのうちに、便乗してきた商人船の出帆の日が迫った。今は俊寛が生活した旧跡でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問わず、島中を縫うように駆け回った。

四日目の夕暮、有王は人里遠く離れた海岸で、人声を聞いた。それが思いがけなくも大和言葉であつた。有王は、林の中を潜つて、人声のする方へ行つた。見ると、そこは、ひろびろと拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕しているのであつた。しかも、彼らは大和言葉で、高々と打ち語つていたのであつた。有王は、おどろきのあまりに、畑のそばに立ち竦^{すく}んでしまった。有王の姿を見たその男は、すぐその鍬を捨ててつかつかとそばへ寄つて来た。

その男は、じつと有王の姿を見た。有王も、じつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は、

「俊寛^{そうす}僧都どのには、ましまさずや」

そう叫ぶと、飛鳥のように俊寛の手に飛び縋^{すが}つた。

その男は、大きく頷いた。そして、その日に焼けて赤銅^{しゃくどう}のように光っている頬を、

大粒の涙がほろほろと流れ落ちた。二人は涙のうちに、しばらくは言葉がなかった。

「あなあさましや。などかくは変らせたまうぞ。法勝寺ほうしょうじの執行しぎようとして時めきたまいし君の、かくも変らせたまうものか」

有王は、そう叫びながら、さめざめと泣き伏した。が、最初邂逅かいこうの涙は一緒に流したが、しかしその次の詠嘆には、俊寛は一致しなかった。俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を不思議そうに見ていた。

彼は、有王が泣き止むのを待つて、有王の右の手を掴つかんで、妻を磨さしまねくと、有王をぐんぐん引張りながら、自分の小屋へ連れて帰った。有王は、その小屋で、主に生き写しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を擦さすりながら、これが徳寿丸とくじゅまるであるといつて、有王に引き合せた。その顔には、父らしい嬉しさが、隠し切れない微笑となつて浮んだ。

が、有王はすべてをあさましいと考えた。村上天皇の第七子具平親王ともひらしんのう六世皇孫せいのかうそんである俊寛が、南蛮の女と契ちぎるなどは、何事であろうと考えた。彼は、主が流人あるじになつたため、心までが畜生道に陥ちたのではないかと嘆き悲しんだ。

彼は、その夜、夜を徹して俊寛に帰洛きらくを勧めた。平家に対する謀反の第一番であるだけ

に、鎌倉にある右府うふどのが、僧都の御身の上を決して疎かおろそには思うまいといった。

俊寛は、平家一門が、滅んだときいたときには、さすがに会心の微笑えみをもらし、妻の松の前や鶴の前が身まかつたということをきいたときには、涙を流したが、帰洛の勧めには、最初から首を横に振った。有王が、涙を流しての勧説かんぜいも、どうすることもできなかった。夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物怪もののけが憑ついたものとして、帰洛の勧めを思い切るよりほかはなかつた。

俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで見送りに来た。

そこで、形見にせよといつて、俊寛が自分で刻んだ木像をくれた。それは、俊寛が、彼自信の妻の像を刻んだものだつた。俊寛の帰洛を妨げるものは彼の妻子であると思うと、有王はその木像までが忌わしいものいまに思われたが、主の贈物をむげにしりぞけるわけにもいかなないので、船に乗ってから捨てるつもりで、何気なくそれを受取つた。

別れるとき、俊寛は、

「都に帰つたら、俊寛は治承三年に島で果てたという風聞を決して打ち消さないようにしてくれ。島に生き永らえているようなことを、決していわないようにしてくれ。松の前が、鶴の前が生き永らえていたらまた思うようもあるが、今はただひたぶるに、俊寛を死んだ

ものと世の人に思わすようにしてくれ」

そんな意味をいった。その大和言葉が、かなり訛なまりが激しいので、有王は言葉通りには覚えていられなかった。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、しばらく海辺に立って見送っていたが、やがて皆は揃って、彼らの小屋の方へ歩き始めた。五人の子供たちが、父母を中に挟んで、嬉々として戯たわむれながら帰って行く一行を、船の上から見ていた有王は、最初はそれを獣か何かの一ひと群むれのようにあさましいと思っていたが、そのうちになんとも知れない熱い涙が、自分の頬を伝っているのに気がついた。

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」 文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：大野 晋

2000年8月28日公開

2005年10月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俊寛 菊池寛

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>